伝書 DENSHO

2010年 秋

ミシガン大学
国際研究所
・
日本研究センター

目次

所長挨拶　2

総編集長より　3

図書館司書より　4

アジア図書館：歴史一望　4

ミシガン大学美術館の信楽焼　6

日本の長き19世紀　7

教員・卒業生・フレンドによる新著　7

お知らせ　8

教員短信　9

CJS教員の受賞　10

教員研究助成金　11

センター催し物　12

これまでの催し物　12

2010年秋季カレンダー　13

学生・卒業生短信　14

学

所長挨拶

今年度は、ミシガン大学国際研究所の他の地域センターの多くが50周年を祝福する年です。NDEAタイトルVI(国家防衛教育法第6編)プログラムとフォード財団がミシガン大学の中国研究、東南アジア研究、南アジア研究、ロシア・東欧研究、中東・北アフリカ研究の各センターに経済的支援を行って以来、半世紀が経ったわけです。日本研究センター(以下「当センター」、「CJS」等)は、1947年に創設されすでに50周年を経過していることから、正式な祝福は行いませんが、諸センターに同調し、ミシガン大学の地域研究の大記念周年に参加します。

この機会は私に回顧の念を起こしました。私は、このニュースレターの前回号でも行ったように、過去の一つの文書に焦点を当ててみたいと思います。1946年、米国社会科学研究評議会は、ミシガン大学の地理学教授ロバート・B・ホールに対し、26大学を訪問してその当時はまだ比較的新しかった地域研究の学術上の成り立ちについて調査を実施するよう要請しました。ホールは報告書『Area Studies: With Special Reference to their Implications for Research in the Social Sciences (地域研究：社会科学に対する影響への特別な言及を添えて)』を編集し、同書は1947年に出版されました。ホールは、彼が出会った初期のプログラムを評価し、しばしば雄弁な文体で地域研究を正当化しています。この彼の報告書は、地域研究の基礎を成す文書の一つです。これはさらに、当センターの基礎を成す文書の一つでもあります。ホールは、日本の専門家であり、この報告書と同じ年に設立された日本研究センターの初代所長でもあったのです。彼の表明は、初期のCJSを形成した理念を反映しています。

第二次世界大戦は当然のことながらホールの考察のなかに大きくそびえ立っています。彼が行った最初の主張は、苦労して手に入れた平和を維持するための知識の必要性でした。彼が提起した問いの苦悩と切迫感は明らかにその当時のものですが、それでもその不穏な投影は我々に今もなお学ぶべき教訓があることを告げています。

> 我々は、一世代で二つ目の恐ろしい大戦を終えた。現在の我が国の他国との関係は、納得できる状態からはほど遠く、場合によっては非常に危険である。我が国の旧式の教育の方法および研究の方向性は、平和を維持することにも最も効果的に戦争に勝つことにも適さないものであることが証明された。世界大戦は、仮に我々が敵と味方をより良く知っていた場合よりも、恐ろしいものと化したのだろうか？世界大戦は不可避のものだったのだろうか？あるいは、より賢明な国家の政策や行為であったなら、それが我々が対戦することになった人々の生活状態や願望の充分な理解に基づいたものであったなら、戦争を防止し得たのだろうか？我々が対峙しなければならない国家と人民をより良く知っていたなら、永く変わらぬ平和により早く到達し、それをより確かに維持できるのであろうか？こうした問いには、希望の含み、ならびに米国の学問の責任が存在する。

私たちが現在生きている世界は、より安全なわけでもなければ、学問の責任がより軽いわけでもありません。私たちは、学問がホールが示唆したほど直接的に国家に奉仕できるか否か、または奉仕すべきか否かについて、いっそうの問いを提起できるかもしれませんが、いずれにしても無知はなおも敵です。

ホールの地域研究の第二の正当化は、欧米を重視した学問の統制を打破する必要性に関わるものでした。ここでもまたもや彼の文体は辛らつです。「我々は、北大西洋の環境圏に隔離された人間を、人間を研究していると考えて、研究してきた。」人文科学の学者が文化的に特定の知識の必要性を主張したかもしれないところを、ホールは、理論的知識はより多大かつより多様な人口に適用されない限り未検証であると主張し、社会科学者の趣意を保持しました。「我々は、他のすべての地域を知るまでは、知ることを実現できない。我々は、想定を検証するために他地域のデータを必要とする。」1947年以来60年間にわたり、ホールならびに彼の同輩によって開始された運動のおかげもあり、私たちは欧米以外の地域について多くを学んできました。私たちはしかし依然として、地球の限られたセクターに関して生み出された想定を周辺から検証しようとしている自分たちに気づくことがあまりにも頻繁にあります。

ホールは、学問分野間のコミュニケーションを奨励する手段としての地域研究について、最も説得力ある主張を行っています。「今日の概ね自己隔離した学問分野である知識の垂直柱は、老境と完全無知の谷間の間に漂う。一地域の知識全体に対する協力的取り組みは、こうした空虚の部分を埋める一つの方法となる。」知識がいっそう専門化されて成長しつつある現在において、地域研究は、私たちが知っていることを統合し間隙に陥った問題を発見するための重要なアプローチであり続けます。ホールの報告書は、地域研究が、ミシガン大学が自らの顕著な特徴として認識している学際性の現場として、創出され存続してきたことを、再認識させてくれます。

ホールの主要な観察の関連性の継続は、地域研究の組織体が構築された下には確固たる知的基盤が存在することを実証しています。ホールのような、まだ形成されていない種類の学問の必要性を当初から明確に表現する力を備えた思慮深く有能な学者が存在したことは、私たちにとって幸運なことでした。10月29日、国際研究所は、ミシガン大学における地域研究の半世紀を記念するシンポジウムを主催します。

第5ページに続く

総編集長より

1970年代と1980年代は、日本文学批評の革命期でした。その多くが1960年代の政治活動のベテランであった新世代の学者と批評家が、それまで戦後の文学研究を支配していた概ね実証哲学的方法論に対して反旗を翻したのでした。この新規の学問は、言語学分野から採用したアプローチを創作的に作り変え、多々あるなかでもとりわけ構造主義、記号論、現象学的言語学などの過程をしばしば導入して、正当派の解釈に挑戦しました。この過激な変化は、今日も影響を与え続け、日本文学の国内外での研究方法を形成しています。

『*The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies: Politics, Language, Textuality*(現代日本文学研究の言語学的転換：政治、言語、テクスト)』は、マイケル・K・ボーダッシュ(シカゴ大学)が編集し序文を執筆した、この革命に関する英語での最初の批評研究です。同著は、1970年代および1980年代に野口武彦、亀井秀雄、三谷邦明、平田由美など影響力の大きい人物により出版された画期的なエッセイの翻訳を収集しています。さらに、日本における言語学に基づく文学批評と理論の台頭を批評的に表し、それが生み出した新しい可能性と克服できなかった欠点の両方を探求した新規のエッセイ9本も記載しています。多種多様の学問分野の学者が、この変遷の政治的および知的含蓄を検証し、さらにそれが開放した近代日本文学研究への刺激的な新しい道を探索しています。[Michigan Monograph Series in Japanese Studies(ミシガン日本研究シリーズ), no. 68, x + 299 pp., 978-1-929280-60-5(布装丁), $70.00; 978-1-929280-61-2(紙装丁), $26.00]。

当出版会は今夏季、女性研究に関する一連の書籍の出版に着手しました。第一弾は、ローラ・ハイン(ノースウェスタン大学)とレベッカ・ジェニソン(京都精華大学)共同編集による『Imagination without Borders: Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility(国境のない創作力：フェミニストの画家富山妙子と社会的責任)』です。1921年生まれの日本のビジュアルアーティスト富山妙子は、日本、アジア、そして世界で第二次世界大戦が記憶される様相を変化させています。彼女の作品は、単純なスローガンにはまとめきれない帝国および戦争責任の複雑な道徳上の問題と心理上の問題を取り扱い、単なる壮大な美以上の説得力を備えています。

また、日本は帝国主義国でありながら西洋ではなかったことから、彼女の作品に注目することは、通常一括りにされている問題を分解することにもなり、比較分析および国際分析の機会を生み出しています。同著およびそれに付随するウェブサイトhttp://imagination-withoutborders.northwestern.edu/において説明されている彼女の作品はさらに、個人が自らの社会および政府から批評的距離を獲得し反対意見を表現する効果的な方法を発見するために利用する戦略を識別するうえでも役に立ちます。

日本は今日、なおも第二次世界大戦の影響に四つに組んでおり、その取り組みは、政府の矛盾した不安定な行動が大きな理由となり、植民地主義と戦争に明け暮れた何十年もの間の他国に対する国家の暴力行為の責任を受け容れることへの抵抗として広くみなされています。しかし、富山のような一部の個人は、そうした経験に関して、そして彼女の生涯にわたる政治的反対意見にもかかわらず自身を国家の優先事項から解放することの困難性に関して、微妙で思索に富んだコメンタリーを生み出しています。日本史ならびにアジアが埋め込まれた世界史に関する富山の洗練されたビジュアルコメンタリーは、近代史の追憶の困難な情勢を通じた説得力ある指針を明らかに日本人の声で提供しています。[Michigan Monograph Series in Japanese Studies(ミシガン日本研究シリーズ), no. 69, viii + 164 pp., モノクロ挿絵26点, 978-1-929280-62-9(布装丁), $60.00; 978-1-929280-63-6(紙装丁), $24.00]。同著に付随するウェブサイトは、同著中の全挿絵ならびに同著に挿入されていない画像を美しい全色複製版で掲載しています。

当出版会の最新の出版物は、P・F・コーニッキ、マーラ・パテッシオ、G・G・ローリーの共同編集による『The Female as Subject: Reading and Writing in Early Modern Japan(主題としての女性：近代日本初期の読み書き)』は、1600年から20世紀初頭までの日本の女流作家の豊かで生き生きとした世界を披露しています。欧州、日本、北米からの国際学者グループによる11本のエッセイが、どのような異なる階層の女性が読書をしたか、どのような書籍が特定的に女性を対象に出版されたか、どのようなジャンルを女性が執筆対象として選択したかを検討しています。著者たちは、女性が修得した異なる種類の教育および彼女たちが達成した読み書き能力水準について探求し、女性の書籍、雑誌、講演への参加を究明しています。その結果としての読者および著者としての女性の描写は、さらに30点ほどの白黒の挿絵によって強調されています。

あまりにも長きにわたり、女性は、近代日本初期における文化的生産の担い手としては概ね不在でした。同著中のエッセイは、女性を重視することにより、その時代の日本社会について私たちが知ることの再考を可能にしてくれます。その成果は、読者、著者、そして文化の活性剤としての新しい女性史です。

同著は江戸時代および明治時代の日本を学ぶ学生と教師の必読書です。さらに、東アジアの文学史および書物史の学者にとって貴重な比較データを提供しています。[Michigan Monograph Series in Japanese Studies(ミシガン日本研究シリーズ), no. 70, x + 279 pp., 978-1-929280-64-3(布装丁), $70.00; 978-1-929280-65-0(紙装丁), $26.00]。

日本研究センター出版会総編集長
ブルース・ウィロビー

図書館司書より

私は、1999年以来、日本コレクションおよびアジア図書館からのこうしたニュース報告を担当していますが、今回号から、アジア図書館の公共サービス担当の新任司書であるブライアン・ヴィヴィエールが私に加わります。この変更によって、アジア図書館の活動のより広範囲にわたる更新情報がCJSコミュニティに提供されるようになります。

アジア図書館は最近、日本研究コミュニティのニーズを最適に満たす取組みにおいて、日本語デジタル・リソース提供の新規トライアルに着手しました。当図書館では、購入候補品目とCJSの研究者のニーズとの間の適合性を評価するために、ユーザーからトライアル経験についてフィードバックを得られることを期待しています。

また、アジア図書館は、公共サービス・プログラムの拡張を検討しています。当図書館は、授業のサポートとしてアジア図書館のリソースをより良く利用する方法を模索するために教師たちとより親密に協力できることを望み、図書館指導セッションに関する提案を大いに歓迎します。当図書館ではさらに、閲覧室の改装が完了したことを喜んで発表します。一新されたスペースには、今秋季に始まる授業に利用可能とされるセミナー室も含まれます。セミナー室利用に関心のある教員は、ブライアン・ヴィヴィエール(bvivier@umich.edu)までご連絡ください。

アジア図書館
日本部部長
仁木賢司

アジア図書館
歴史一望

ミシガン大学アジア図書館は、北米で最も包括的な東アジア関係資料コレクションの一つです。2010年6月現在、当図書館は、約750,000点の中国語、日本語、韓国語の書籍、約1,000点の現在購読中の逐次刊行物、約77,000点のマイクロフォーム形式の資料を所蔵しています。当図書館はさらに、東アジア言語による多数の電子リソースへのアクセスを提供しています。

アジア図書館の起源は、ミシガン大学図書館が新しい分館「極東図書館」を開設した1948年に遡ります。最初の10年間のコレクションの拡大は、日本のリソースに焦点を当てました。1950年10月、極東図書館は、岡山在住のミシガン大学教員の援助を得て、香川県坂出市の鎌田共済会図書館から18,200冊の購入を行いました。この書籍は、元は同図書館の創設者である鎌田勝太郎の個人所蔵コレクションの一部であり、同図書館が郷土博物館に転換する際にミシガン大学がコレクションとして購入しました。購入書籍には、あらゆる主題に関する戦前の日本語の作品ならびに数点の希少本も含まれていました。さらに、ミシガン大学卒業生で後には日本興業銀行総裁を務めた小野英二郎が、明治経済史に関する幅広い図書館コレクションの中枢を構成することになる書籍を寄付しました。

ミシガン大学の日本コレクションの多々ある中でも特に貴重な歴史的財産には、連合国軍最高司令官(SCAP)の役人であったアルフレッド・R・ハッシーが執筆した文書が挙げられます。鋭い歴史観を備えた人物であったハッシーは、日本国憲法草案における中心人物であり、彼の文書は占領下日本に関心を持つ者にとっては非常に貴重なものです。彼の文書は、GHQ憲法草案(マッカーサー草案)に至るまでの出来事および草案をもたらした環境に光明を投じています。ハッシーは、憲法そのものに加え、自分の最大の貢献は、公民の自由の強化と労働省の確立であると確信していましたが、研究者たちは、彼が残した情報を調べることによってこの確信が価値あるものか否かの判断を下すはずです。彼のファイルは、当然のことながら憲法草案そのものに加えて、選挙運動および選挙結果の記録、皇居の在庫、米国教育訪日施設団の記録、警察の活動記録、公民意見調査、愛国者突撃隊による函館共産主義者センター襲撃に関する情報、新憲法推進のためのハッシーのプレスコンファレンス、彼の通信文(彼に多大な援助を提供したミシガン大学教授との通信文を含みます)、その他諸々を通じて、占領下日本の広範囲にわたる鮮明な様相を提供しています。

極東図書館は、1950年代初期には50,000点規模のコレクションに成長し、専用の閲覧室と書架を所有していました。同館の名称は1959年に「アジア図書館」へと変更されました。そして1961年の中国研究センターの設立により、当図書館の中国コレクションの急速な拡大が実現しました。東アジア図書館コミュニティにおいて、ミシガン大学アジア図書館は、戦後の北米で最も急速に成長したコレクションとして認識されるようになりました。

1950年代後半以来、アジア図書館は、この種の図書館として米国最大の規模を誇り、また全米レベルで最も重要な図書館の一つに格付けされています。この急速な発展は、ミシガン大学およびその他官民両方の唱導者からの強力な財務支援、ならびに鈴木幸久(1961〜1969年)と萬惟英

晃州地輿全圖。清朝時代(1644〜1912年)の中国南部の湖南省晃州廳の地図(制作年不明)

(1969〜2003年)の両人の40年以上にわたる卓越した指導力によって実現されました。

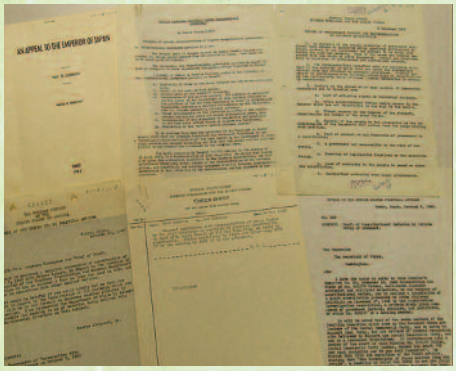
20世紀の最後の10年間は、アジア図書館にとって新しい発展の時代となりました。1995年のコリア研究プログラムの設立、それに続く2007年のコリア研究センターの設立により、ミシガン大学は、東アジア3国それぞれの学際センターを有する全米初の高等教育機関となりました。学術プログラムが拡張するなかで、当図書館は、今世紀初頭に韓国語資料の専門図書館員職を新設しました。コリア財団、図書館管理部門、地元のコリアン・コミュニティからの支援により、韓国語コレクションはフルスピードで発展し始めました。

1990年代に生じたまた別の重要な変化は、デジタル・リソースへの移行でした。ミシガン大学アジア図書館は、最初にユーザーに電子リソースを提供した先駆的な東アジア・コレクションです。1990年代末までには、中国語、日本語、韓国語のCR-ROMが大量に購入されました。これらのリソースへのアクセスを促進するために、当図書館は、北米初の東アジア研究コンピューター・ラボを開設しました。さらに1994年4月には当図書館専用ウェブサイトの運営も開始しました。これは東アジア研究を専門とする最初の多言語ウェブサイトの一つです。

21世紀に入った今も、アジア図書館は変わらず東アジア・コレクション発展の先導的役割を担っています。当図書館の東アジア3ヵ国語による電子リソースへのオンラインアクセスは大幅に拡張されました。ミシガン大学は、グーグル・ブック検索プロジェクトに加入した教育機関の一つとして、大量の東アジア関係文献を最初にデジタル化しました。この大規模なプロジェクトによって作成された電子図書の多くは現在、共有オンライン・デジタル書庫であるハティ・トラスト(Hathi Trust)を通じて利用・検索可能です。デジタル時代は先例のない新しい難題ももたらしていますが、ミシガン大学アジア図書館の職員は、今後も長年にわたりミシガン大学内ならびに学外の東アジア研究コミュニティに質の高いサービスを提供し続けていけるものと確信しています。

ミシガン大学アジア図書館館長
中国ビブリオグラファー
楊繼東

アジア図書館の閲覧室(2010年2月改装)。



『Hussey Papers(ハッシー文書)』。ハッシー文書は、日本の連合国軍最高司令官(SCAP)(1946〜1952年)政府部門(アルフレッド・R・ハッシーが率いた)の公文書の一部を構成する。SCAPの人事書類、組織図、日報、およびSCAPによる日本政府再編に関する研究および指令が含まれる。

所長挨拶

第2ページから続く

考察の中心は正当ながら地域研究の将来ですが、過去を振り返ることも今後に向かううえで役に立つ可能性があります。

この点において、ホールの報告書の印象深い側面の一つは、初期のアプローチの潜在的欠陥を思慮する態度です。ホールは、学問分野が隔離されることを嘆いていますが、地域研究自体が隔離を育てる可能性があることを認識しています。「地域研究が地域的にも機能的にも隔離されたものとならないように見守るために、組織および実務の両面において注意が行使されなければならない。関与する特定地域は、地方および世界におけるその位置付けと地方・世界との関係に関して、常に考察され続けるべきである。」全地域を通じてグローバルに考えること、つまり地域的境界と政治的境界を越える社会の現象と思想の伝達をたどること、そして特定の解釈および文化的屈折の質感を認識しつつこれを行うことは、地域研究にとって依然として大いなる挑戦であると共に大いなる機会でもあり続けます。

所長
ケン・K・イトウ

ミシガン大学美術館の信楽焼

ミシガン大学美術館（UMMA）では今シーズン、日本の美術・生活・工芸に焦点をあて、「Turning Point: Japanese Studio Ceramics in the Mid-20th Century(日本現代陶芸の転換点)」と題した特別展を開催しました。この展覧会の一つのセクションでは、「信楽：伝統と革新」とし、桃山時代(1583〜1615年)由来の茶道具の伝統を復興させた三代高橋楽斎(1898〜1976年)の作品、ならびに現代陶芸家の神山清子(1936年生まれ)、奥田英山(1944年生まれ)の作品を展示しました。13世紀以来、無釉薬や自然灰釉の陶器の生産中心地であった信楽の陶工たちは、千利休(1523〜1591年)をはじめとした桃山時代と江戸時代初期の侘び茶の茶人たちによって高く評価されました。現代信楽の作家は、この土地の特徴である粗粒の陶土に自然灰釉をかけた陶器を制作しています。

現代信楽焼作品の展示は、信楽焼の所在する滋賀県信楽町とミシガン大学との間の長い交流の結果として実現しました。1960年代初期、ミシガン大学の陶芸学教授であったジョン・スティーヴンソンは、やはり陶芸家であった妻のスザンヌと日本に滞在し、三代高橋楽斎などの大家の工房で学びました。当時のUMMA館長チャールズ・ソイヤーが、スティーヴンソンに対し、UMMAのために現代作家作品の購入を依頼し、その結果、高橋楽斎の花器と角皿がUMMAのコレクションに加わり、本展にも出品されました。

神山清子氏と学生たち

2008年、信楽作家2名がミシガンを訪問し、日本研究センターおよび他の会場で実演を行いました。両人の訪問はミシガン州と滋賀県の文化交流の一環として行われたものでした。この滞在の間にお会いした奥田英山氏は、その後UMMAのために、擂鉢といわれる大作を寄贈してくださいました。同作品も本展に展示されています。また2009年、本展への出品作を調査するために、滋賀県庁の川口久隆氏と宮村佐衣子氏と共に信楽を訪問し、スケジュールの合間にひょんなことから神山清子氏に出会いました。信楽焼の女性作家の第一人者である神山氏は、合計11点の作品をUMMAに寄贈してくれることになりました。(また別に1点が、ミシガン在住の現代日本陶芸作品収集家でありミシガン大学卒業生でもあるデイヴィッド・ロンドン氏により購入されUMMAに寄贈されました。)神山氏は現在、高齢になり長年保管してきた自分の作品を分散する意向であること、また米国の鑑賞者を高く評価していることを話してくださいました。

神山清子氏は、本展プログラムの一環として、5月にアン・アーバーを訪れました。滞在中、彼女は、美術デザイン学部の犬塚定志教授と私が担当した「A World in a Tea Bowl: Exploring Japanese Culture through Ceramic Art(茶碗のなかの世界：陶芸を通して学ぶ日本文化)」の授業に参加し、作陶を実演しました。彼女はさらに、UMMAでも立見御礼の観衆の前で実演を行いました。また、女性陶芸家および活動家（日本初の骨髄バンクの設立に尽力）として、波瀾万丈の半生を送ってきた神山氏を描く映画『火火』(高橋伴明監督、2004年)も上演されました。彼女の訪問は、スティーヴンソン夫妻、マリー・ウー、ジョージェット・ジルベス氏など1960年代に日本で勉強した陶芸家たちにとって、印象深い機会となりました。美術デザイン学部の名誉教授であるジルベス氏は、彼女自身も1960年代初期に信楽に窯を構えていたことから、男性が支配する陶芸界

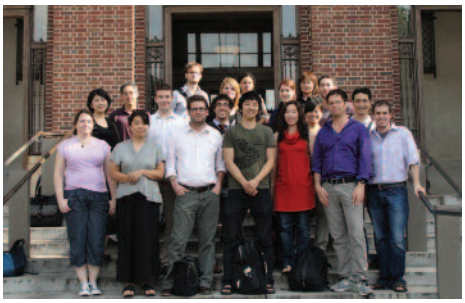
奥田英山氏と本人自作の擂鉢

でキャリアを築いていった神山氏の話に特に熱心に耳を傾けていました。神山氏は、ジルベス氏をはじめとした西欧からの女性芸術家の存在のおかげで、窯焚きには女人禁制など多くの差別的因習が変化し始めた、と彼女の観察に共鳴していました。

本展覧会は終了しましたが、神山、奥田両作家から寄贈された見事な信楽焼の作品は、三代高橋楽斎の作品と共に、新設のマキシーン&スチュアート・フランケル&フランケル・ファミリー・ウィングの日本ギャラリーに陳列される予定です。是非とも美術館を訪れ、これら作家が、力強いフォルムのうえに独自のビジョンを確立した信楽作品を鑑賞してください。なお、本展準備のための信楽滞在、本展開催、そして関連プログラムを支援してくださった日本研究センターに深くお礼を申し上げます。

ミシガン大学美術館
アジア美術学芸員
及部奈津

日本の長き19世紀


ワークショップのグループ写真。

ミシガン大学は、6月7〜12日に、大学生上級学年と大学院生を対象に「Japan's Long Nineteenth Century(日本の長き19世紀)」を主題とした学際的ワークショップを主催しました。このワークショップは、アジア言語文化学部の福岡真紀とジョナサン・ズウィッカーが、2009年冬期トヨタ招聘客員教授であったコーネル大学の平野克弥教授と開催したものです。目的は、様々な大学および分野の学生を一同に集め、1780年代から1910年代までの歴史と文化に焦点を当てることにありました。ワークショップの第一目標は、似通った研究的関心を持つ学生と学者のコミュニティを生み出し、学際的な探求と協働を行う新モデルを奨励するフォーラムを提供することでした。全米中ならびにドイツとメキシコから、大学生上級学年から博士号候補者、さらには博士号課程を最近終えた者まで、様々な学生21名が集合しました。

ワークショップは、毎日(月曜〜土曜)午前9時半から午後4時半まで実施されました。午前のセッション(午前9時30分〜午後12時30分)は、予め配布されたオーガナイザーおよび招待参加教員(イエール大学のダニエル・ボツマン、シカゴ大学のスーザン・バーンズ、シカゴ大学のテツオ・ナジタ(欠席))による論文に関する集中協議にもっぱら充当されました。協議は極めて活発で広範囲を網羅し、しばしば予定の休憩時間や昼休みに及び、あらゆるレベルの学生全員が気軽に質問し話合いに参加しました。教員たちはおしなべて質問と協議に感心させられ、学生たちは参加への励ましを実感しました。

午後のセッション(午後1時30分〜4時30分)は、大学中の様々な図書館や美術館での実践体験の形態をとり、その後、対象資料を歴史的研究にいかに利用するかを中心とした協議を行いました。月曜日には地図図書館を訪問し、カール・ロングストレッチとティム・アッターの世話を受け、江戸時代と明治時代の地図に焦点を当てました。火曜日には美術館を訪問し、アジア美術学芸員の及部奈津が、版画、書籍、掛け軸、陶器、布地などを含む多種多様にわたる江戸時代の資料を案内してくれました。水曜日には、アジア図書館の仁木賢司に世話になり、官報から、旅行ガイドブック、物語や詩歌、さらに初期の訪日欧州人の手記に至るまで、様々な版画本を研究しました。木曜日にはウィリアム・クレメンツ図書館に出向き、ビジュアル・マテリアルのキュレーターであるクレイトン・ルイスが同図書館が収集した様々な地図や印刷された新聞、ならびにペリー来航に関係する手紙や日記を紹介してくれました。金曜日はオープン・デーで、学生たちはその週に見出した資料を復習し、さらに美術館のアジア美術品の修復保全セッションに出席するよう奨励されました。土曜日には、アジア図書館の鈴木真理が、19世紀日本研究におけるデジタル・リソースの利用について、ワークショップを率いてくれました。

全体的に、ワークショップは大成功でした。私たちが最も嬉しかったのは、学生たちが非常に快適に過ごせたこと、教員とまた学生同士で非常に活発な相互のやり取りを行ったことでした。私たちの希望は前進する脚を持った、参加者全員が属していると感じられる、知的コミュニティを創造することにありました。私たちは、2012年に第2回ワークショップを計画することに加え、協議フォーラムを開設し、ウェブサイトを設定するしてリソースを掲載し引き続き対話と相互のやり取りを奨励することも考えています。私たちの計画は、ウェブサイトとフォーラムを公共のものとし、学者と学生のより大規模なコミュニティを生み出すことで、果てはフォーラムを日本の江戸時代後期および明治時代の研究に関係するアイディアとリソースの交換の主要な場所にすることを希望しています。

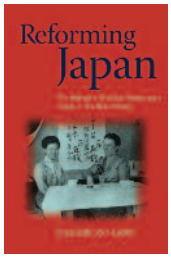
アジア言語文化学部准教授
ジョナサン・ズウィッカー

教員・卒業生・フレンドによる新著

『*Reforming Japan: The Woman's Christian Temperance Union in the Meiji Period*(日本の改革：明治時代の基督教婦人矯風会)』

エリザベス・ドーン・ルブリン(MA、1994年)は最近、『*Reforming Japan: The Woman's Christian Temperance Union in the Meiji Period*(日本の改革：明治時代の基督教婦人矯風会)』(University of British Columbia Press、2010年)を出版しました。この著作は、最初の3章で基督教婦人矯風会（WCTU）の1886年の創立から1912年までの組織的歴史を取り上げています。後半は、同会の廃娼婦運動、禁酒運動、帝国社会体制を尊重する会員の性質、および戦中のアウトリーチに関する諸々の主題を分析を添えて追求しています。ルブリンは、全体を通して、会員は日本の進歩を推進するという日本人としての鋭い義務感を感じていた、と主張しています。さらに会員は、国家の進歩、および特に西洋の帝国諸国との平等性は、キリスト教およびキリスト教が促進する価値と道徳の広範な受容を必要とすると確信していました。

第8ページに続く



教員・卒業生・フレンドによる新著

第7ページから続く

ルブリンが示すとおり、WCTUの婦人たちは、自らの宗教上および改革上の目標を推進するにあたり、道義に訴える話術と宗教的な修辞学的説得法を包めた表現を観衆が受容すると分かった際には、それらを活用しました。それと同時に彼女たちは、キリスト教コミュニティを超えて伝えるには、自分たちのメッセージを快い威嚇的でないものとする必要があることを鋭敏に認識していました。彼女たちは、国家の進歩と必要性の表現の中に自分たちのメッセージを暗示することによって、それを実行しました。さらに、自分たちの改革目標を帝国社会体制に結びつけ、その威信と正当性に肖ろうとしました。彼女たちは、個人の思いつきに依存することには満足せず、国家当局も動員して自分たちの目標の達成を試みたのです。最も顕著なところでは、彼女たちは、日ごろから政府機関に対して政策変更を求める公式の請願書の提出や非公式な個人的懇願を行い、改革法案を獲得しました。そしてこうした嘆願では、国家が官民の行動を指令する力を確信していることを示しました。さらに、国家を「良い」政策を施行するよう指導する自分たちの権利も主張し、自分たちは忠実で愛国心ある民衆を形成するための政府制度の単なる手先ではないことも明らかにしました。

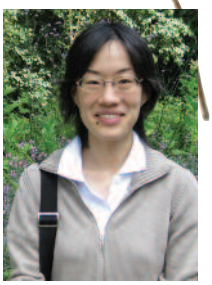
ルブリンが表現する国家に関与したWCTUの婦人たちの描写は、従来型の国家と市民の結託の概念を階層的であるとして拒絶し、明治時代の日本女性を政治的に抑制されていた存在として特徴付けることに異論を唱えています。ルブリンはさらに、キリスト教徒は国家に対する忠誠を証明するために信念と原則を曲げたとする一般概念論にも異議を申し立て、また、市民とジェンダーの役割に関する議論ならびに公共の場の誕生に関する議論において、日本の近代化において市民が果たした類の役割についての理解を推し進めています。ルブリンの同著のための研究は、彼女が日本での日本語研修学生であったときに受領したCJSの補助金によって助成されました。

『*The Japanese Economy in Retrospect: Selected Papers by Gary R. Saxonhouse*(日本経済回想：ゲイリー・R・サクソンハウス論文選集)』

ゲイリー・R・サクソンハウスが死去してから4年近くが経った最近、彼の論文選集がワールド・サイエンティフィック社から2巻構成で出版されました。これは、サクソンハウス教授と親しかった同僚、ロバート・スターン(ミシガン大学経済学部名誉教授)、ガヴィン・ライト(スタンフォード大学米国経済史ウィリアム・ロバートソン教授)、ヒュー・パトリック(コロンビア大学国際経営学ロバート・D・コーキンズ名誉教授、日本経済経営研究所所長)によって編集されました。第I巻は、日本の近代経済史を理解する鍵となった彼の出版物の選集です。第II巻は、日本の技術が経済の成功をいかに促進したかに焦点を当てた彼の出版物を収集したものです。この2巻の選集に関する詳細情報につきましては、http://www.worldscibooks.com/eastasianstudies/7256.htmlをご覧ください。

お知らせ

2010〜2011年度トヨタ招聘客員教授


鹿毛利枝子

CJSは、9月20日に第35期トヨタ招聘客員教授の歓迎レセプションを行いました。客員教授の鹿毛利枝子は、東京大学大学院総合文化研究科准教授です。鹿毛教授は、京都大学から学士号、ハーバード大学から博士号を取得しました。彼女の研究は、第二次世界大戦の後遺症の中の日本市民社会に焦点を当てています。これは、近々出版される彼女の新著『Civic Engagement in Postwar Japan: The Revival of a Defeated Society (戦後日本における市民の関与: 敗北社会の復興)』(Cambridge University Press)の主題でもあります。鹿毛教授は、アン・アーバー滞在中には、研究実施に加えて、秋季と冬季に半期ミニコース2本の授業を行います。秋季ミニコースは「Civil Society in Japan (日本の市民社会)」と題されています。さらに、2月10日に新著に基づくCJSヌーン・レクチャーを行う予定です。

米国教育省「タイトルVI」助成金受領

8月、米国教育省は「タイトルVI」プログラムの下に4年間の助成金をミシガン大学の東アジアセンターに授与しました。この資金援助は、国際研究および地域研究、外国語教育、国際ビジネス教育における米国の能力を開発することを目的としています。CJSは、共に東アジアセンターを形成しているミシガン大学の中国研究センターおよびコリア研究センターと、全米リソースセンター(NRC)指定を受けたことを活用して、言語研究および地域研究のトレーニング、カリキュラム開発、図書館の購買活動、K-16の生徒および教師へのアウトリーチ、ならびに公共プログラムを援助していきます。

このNRC資金援助に加え、ミシガン大学東アジアNRCは、外国語・地域研究(FLAS)フェローシップを受けました。このフェローシップは、各センターにより管理され、大学生および大学院生の外国語学習を援助するために授与されます。

ミシガン大学東アジアNRCは、今回連邦政府資金援助を受けたミシガン大学7センターの一つです。東アジアNRCは、全米唯一の東アジアセンターとして最高総額の「タイトルVI」助成金を受領しました。

アジア図書館旅費補助金

2010年7月1日から2011年6月30日までの間にミシガン大学アジア図書館所蔵資料の活用を希望する日本研究者を対象に、旅費、宿泊費、食費、コピー料金を軽減する目的の補助金として、最高700ドルが提供されます。アジア図書館は、ゴードン・W・プランゲ文庫コレクションのマイクロフィルム版、ならびに米国で唯一の『東亜同文書院大旅行誌』と『東亜同文書院中国調査旅行報告書』のセット(マイクロフォーム版)を所蔵しています。

図書館に関する詳細情報につきましては、http://www.lib.umich.edu/asiaをご覧ください。または図書館アシスタント(734)764-0406までご連絡ください。関心ある研究者の方は、(1)申請書、(2)研究内容および所蔵資料の利用の必要性に関する簡略説明書(250語以内)、(3)アクセスを希望する資料のリスト(申請前に図書館のオンライン目録で該当資料が利用可能とされていることを確認してください)、(4)最新の履歴書、(5)予算、(6)旅程案を、当センター宛に提出してください。当センターでは、Eメール(umcjs@umich.edu)での申請を2011年5月31日まで受け付けます。

教員短信

マイカ・L・アワーバック(アジア言語文化学)は、日本学術振興会(JSPS)の2010～2011年度フェローシップ(特別研究員)を受けました。現在、京都の国際日本文化研究センターに拠点を置き、植民地朝鮮の日本の仏教に関する自著を更新中であり、さらに19世紀後半以降の日本仏教史の他の側面に関する新研究にも着手しています。また、関心のある1945年以前の日本の従軍および刑務所付き僧侶、日本の新宗教である天理教、そして博物学者、生態学者、民俗学者、時には仏教徒でもあった南方熊楠(1867～1941年)などの関連研究課題も探求しています。

ケビン・グレイ・カー(美術史学)、米国社会科学研究評議会／日本学術振興会から2010～2011年度補助金を受領しました。東京の学習院大学に所属し、寺社の草創物語を描いた中世の絵画(縁起絵)に関する環境とアイデンティティーを研究しています。

ポール・ダンラップ(生態学・進化生物学)は、この夏の7週間を沖縄の琉球大学熱帯生物圏研究センター瀬底研究施設で過ごし、ヒカリイシモチの養殖を学び、ヒカリイシモチの形成機構の研究について中村將教授に協力しました。この仕事は、共生発光細菌を有するヒカリイシモチの共生発光に関する長年の研究の一環です。

瀬底島の瀬底研究施設の景観(研究施設の前方の海側から)

アイリーン・ガッテン(CJS非常勤研究員)は、南カリフォルニア大学のジョーン・ピゴット教授と東京大学史料編纂所の吉田早苗教授が率い南カリフォルニア大学で行われた1週間の編集会議に参加しました。目標は、藤原宗忠の漢文日記『中右記』からの、将来の鳥羽天皇の1103年の誕生を中心とした抜粋部分の英訳最終稿を見直すことでした。グループは、翻訳の最終化に加えて、この訳著に収録され出版される数本の状況説明エッセイの検討も行いました。

阿部マーカス・ノーネス(スクリーンアート文化学; アジア言語文化学)は、呉文光(ウー・ウェングアン)と彼の草場地(ツァオチャンディー)ワークステーション(北京)とのコラボレーションにより原一男の中国訪問を組織しました。原監督の映画4本を上映し、さらに呉監督の草場地ワークステーションに始まり、その後は中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画祭、夏旦大学、上海大学、上海戏剧学院において、多種多様のディスカッションやパネルを開催しました。さらに今夏、第10回キネマクラブを共同主催し、ハワイの東西センターにおいて開催しました。東アジア映画におけるカリグラフィーに関するプロジェクトを開始するために大学院生キム・ジウン(人類学)を雇う夏季補助金を受領しました。

ジェニファー・ロバートソン(人類学；美術史学)は現在、画像と人工産物の歴史と社会的生産に対する個人的かつ専門的な長年の関心を反映させて、50%を人類学、50%を美術史学に充てています。昨年度は、アメリカ人類学会の東アジア人類学会会長として、新しいウェブサイトhttp://www.aaanet.org/sections/seaa/を立ち上げ(アン・アーバーのセイコ・シモネス デザイン、ニッキ・ナバズニ管理)、大学生ならびに大学院生の研究プロジェクトと機会に関する情報、長い「有用リンク」リスト、オンライン・リソースなど、多数の新分野の情報を追加しました。最近の出版物の一部には、『Robots "R" Us: Japanese Robot Futures(ロボットザラス：日本のロボット未来)』(2010年8月)、『The Erotic Grotesque Nonsense of Superflat: 'Happiness' as Pathology in Japan today(スーパーフラットのエロチックとグロテスクとナンセンス：今日の日本における病状としての「幸福感」)』(Michigan Quarterly Review、2010年冬季号:1-16)、『Gendering Humanoid Robots: Robo-Sexism in Japan(ヒューマノイド・ロボットのジェンダー化：日本におけるロボ・セクシズム)』(Body and Society 16(2)、2010年6月:1-36)が挙げられます。

最近数ヶ月間には、ハーバード大学国際問題研究所(4月)、オベリン大学(4月)、ボウリング・グリーン大学(4月)、ブラジリア大学(8月)において招待講演を行いました。

ルイス・イェン(運動学)は、ミシガン大学と中国との学術的および文化的なつながりの構築を促進したことが認められ、ミシガン大学のプロヴォスト／学務担当エグゼクティブバイスプレジデントから2010年度ハロルド・R・ジョンソン・ダイバーシティ・サービス賞を受賞しました。

吉浜美恵子(社会福祉学)は、2010年に社会福祉学部の常勤教授に昇進しました。

トヨタ招聘客員教授最新情報

ジュリア・アデニー・トーマス(2009～2010年度TVP)は、ハイデルベルグ大学の客員教授になりました。

CJS教員の受賞

2009年度日米友好基金文学翻訳賞

エスペランザ・ラミレズ＝クリステンセン、ドナルド・キーン教授から受賞。

コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センターは、**エスペランザ・ラミレズ＝クリステンセン**(アジア言語文化学部教授)をその著書『Murmured Conversations: A Treatise on Poetry and Buddhism by the Poet-Monk Shinkei(囁かれた会話：僧侶歌人心敬による歌および仏教に関する専門書)』(Stanford University Press、2008年)により、2009年度日米友好基金の日本文学翻訳賞の受賞者に選出しました。同賞は、日本語の文学作品の完全英訳に関して年次ベースで開催される全米コンテストに基づいて授与されます。この著書の批評の一つは、「詩歌の翻訳は超一流であり、言語学的意味論に忠実でありつつ美学との巧妙な均衡を実現している」(The Journal of Japanese Studies)と指摘し、また別の批評は、「心敬の語句とラミレズ＝クリステンセンの注釈の組み合わせは、この中世後期の思想家の知的かつ精神的な特徴を見事な詳細にわたり吐露している」(Choice)と観察しています。ラミレズ＝クリステンセンは2010年4月9日にニューヨークで開かれた式典において同賞を授けられました。

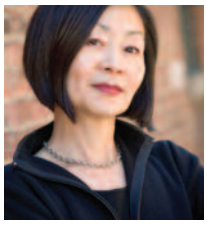
2010年度ジョン・ホイットニー・ホール賞

ケン・K・イトウ(アジア言語文化学部教授、日本研究センター所長)は、自著『An Age of Melodrama: Family, Gender and Social Hierarchy in the Turn-of-the-Century Japanese Novel(メロドラマの時代：世紀末日本の小説における家族、ジェンダー、社会階層)』により、2010年度ジョン・ホイットニー・ホール賞を受賞しました。ホール賞は、日本に関して英語で執筆された卓越した学術書籍に対してアジア学会から年次ベースで授与されます。同賞の選出委員会は、同著を「秀麗に執筆され、徹底的に研究され、理論的に洗練されている」と称し、「学術の模範的成果、かつ対象学問分野ならびに日本研究分野における画期的成果」として同著を引証しています。尾崎紅葉、徳富蘆花、菊池幽芳、夏目漱石による爆発的人気メロドラマ風小説は時には単なる金儲け目当ての粗末な作品とみなされましたが、委員会はこの著書について以下のとおり述べています。「明治後期の不安や緊張が探索された重要な文化的現場として、新しい観点から見ずにはいられなくする。イトウは、一連の慎重で同情的な読解を通じて、家族、恋愛、性の問題を中心に展開する小説の複合的な語り口を実証し、資本主義、新民法、その他の国づくりプロジェクトの側面の結果として生じたイデオロギー的矛盾を解明している。」

『An Age of Melodrama: Family, Gender and Social Hierarchy in the Turn-of-the-Century Japanese Novel(メロドラマの時代：世紀末日本の小説における家族、ジェンダー、社会階層)』ケン・K・イトウ著(Stanford University Press、2008年)

グッゲンハイム研究フェローシップ

北山忍(心理学部教授)は、本人のプロジェクト「Cultural Neuroscience: Building Natural and Social Sciences(文化的神経科学：自然科学と社会科学の構築)」に関してグッゲンハイム研究フェローシップを受けました。文化的神経科学は、生物科学を社会科学および行動科学と統合するものとして出現しました。この新分野は、生物科学に、非常に必要とされている複雑な人間社会で実現されるコンテクストの概念を提供し、またそれと同時に、社会科学と行動科学に精神と身体の間、社会と身体の間、文化と自然の間の従来型の二分法を超えた新しい一組の経験的固定基準を提供します。なかでもとりわけ、文化的神経科学は、人間を生物的に準備されているものの社会文化的環境への積極的関与を通じてのみ完成するものとして捉える、人間に対する新しい見解を育成しています。北山教授は、フェローシップ期間中に、この重要な文化的神経科学の潜在性に焦点を当てた著書を執筆する計画です。



増澤知子(比較文学・歴史学部教授)は、本人のプロジェクト「The Promise of the Secular: William Robertson Smith and the Historical Constitution of Biblical Studies(非宗教の約束：ウィリアム・ロバートソン・スミスと聖書研究の歴史的構築)」に関してグッゲンハイム研究フェローシップを受けました。この研究は、長期にわたり異端審問にかけられた19世紀の聖書学者・アラビア語学者、ロバートソン・スミスのレガシーを検証します。彼は、スコットランド福音長老派教会の信者であったにもかかわらず、20世紀の著名な「非宗教主義者」2名すなわちデュルケムとフロイトの最も物議をかもした側面の一部の基盤となりました。増澤教授は、2010～2011学年度中はプリンストン高等研究所(社会科学部)のフェローとなり、グッゲンハイム研究フェローシップは後の年度に利用します。

最高学術論文賞

筒井清輝(社会学部助教授)は、「Social Problems」誌(vol. 55)に記載された論文「Global Norms, Local Activism, and Social Movement Outcomes: Global Human Rights and Resident Koreans in Japan(世界の規準、現地のアクティビズム、社会運動の結果：世界的人権と在日コリアン)」で今年度のアメリカ社会学会のグローバル社会学・国際社会学部門から「最高学術論文賞」を受賞しました。

教員研究助成金

2010〜2011年度教員研究助成金発表

日本研究センターの2010〜2011年度教員向け研究助成金の受賞者が決定しました。この助成金プログラムは、日本の様々な側面を調査する個人あるいは団体のプロジェクトに対して授与されます。本年度の受賞者およびプロジェクト内容は以下のとおりです。

ケビン・カー(美術史学部助教授)には、本人のプロジェクト「Ecologies of Identity: Sacred Landscapes on the Margins of Medieval Japan(アイデンティティーの生態学：中世日本の狭間の神聖な景観)」への資金援助が授与されました。14世紀の日本は紛争で引き裂かれていました。しかし人々は、ビジュアルアートを通じて彼らが神聖なものとして崇めている景観に深く根を下ろすことにより、分裂したアイデンティティーを再統合しました。日本全国で、人々は、歴史を視覚環境に結びつけた物語を語り、共同社会のアイデンティティーが組織的に関連し合う自然体系と文化体系の機能として内部から発生する生態環境を形成しました。この研究は、地理的地域上は周辺に位置しながら概念的には現地のアイデンティティーそして後には地域間のアイデンティティーの折衝の中心となった4大地域のビジュアル文化、すなわち関東の善光寺阿弥陀三尊、三河の聖徳太子信仰、吉野の蔵王権現、北九州の神武天皇を探求します。この助成金は、カー教授の日本でのフィールドワークの援助となります。

イネス・イバニェス(生態学・進化生物学部助教授)には、本人の研究プロジェクト「Phenological Responses to Climate Change in Japan(日本の環境変化への生活季節学的対応)」への資金援助が授与されました。環境変化の最も顕著な影響の一つは、種の生活季節の変更、すなわち葉や花の出現や渡り鳥の到来などの植物や動物のライフサイクルにおける定期的事象の変化です。こうした生活季節の変化は、種の分布および異種間の相互交差に多大な影響を及ぼし、したがって進行中の変化を予測することは最優先事項となっています。イバニェス教授のプロジェクトの全体的目標は、日本の環境変化に対する種の反応に関する理解を深めること、そしてこうした変化の認識を強化するツールを開発することにあります。イバニェス教授は、日本の研究者と協働し、日本の102ヵ所の気象庁観測所で1953年以降収集されてきた最高120項目の生活季節事象の観察を利用します。この資金援助は日本出張に利用されます。

犬塚定志(美術デザイン学部教授)には、本人の研究プロジェクト「Beyond Site/Sight: Linking Michigan and Shiga through Ceramics Education for Children with Disabilities(現場／視界を越えて：障害児のための陶芸教育を通じてミシガン州と滋賀県を結ぶ)」への資金援助が授与されました。日本には、盲目の人、視聴覚の不自由な人、認知障害のある人のために陶器を貴重な表現方法として用いる広く知られている伝統があります。このプロジェクトは、ミシガンと日本の障害を持つ青少年の作品を扱った2つの展示会、すなわち、1) 国際陶芸展覧会である信楽陶芸トリエンナーレでは、「Many Ways of Seeing(多くの見方)」ワークショップからの障害児たちによる作品をこのイベントに含め、また、2) デトロイト地域の障害を持つ青少年の作品を長浜のボーダレス・アートミュージアムNO-MAで展示し、滋賀県の障害を持つ子どもたちの作品をミシガン大学デトロイトセンターのデトロイト美術デザイン学部さらに可能性としてはデトロイト美術館で展示するという、将来の2地域間の交換作品展示会のための基礎を築きます。

筒井清輝(社会学部助教授)には、本人のプロジェクト「The Dynamics of Corporate Social Responsibility in Japan(日本の企業社会責任のダイナミクス)」への資金援助が授与されました。過去15年にわたり、主要なグローバル企業社会責任(CSR)の枠組みが幾つか誕生し、より多数の企業の参加を確保してきています。企業の実務行為における人権保護と環境保護を促進するCSRの枠組みのこうした成長には、CSR活動は企業の利益に直接的に役立つものではないことを鑑みるに、当惑させられます。このプロジェクトで、筒井教授は、何が日本企業のグローバルCSR枠組みへの参加意欲をかきたてているのか、また、日本企業の参加は各社のCSR慣行をいかに変化させているか／いないかについて、理解を深めることを追求します。筒井教授の以前の研究は、日本の国家の国際人権活動への関与の様相を、世界的人権規準が日本の少数民族政策に及ぼした影響に焦点を当てて、検証しました。今回の新研究は、人権および環境に関する大半の研究の焦点である国家および市民社会を越えて、企業を、こうした問題をめぐる国際規準の普及の重要な担い手として、検証します。

吉浜美恵子(社会福祉学部教授)には、本人のプロジェクト「Multi-level, Cross-national Analyses of Domestic Violence(ドメスティック・バイオレンスの国際マルチレベル分析)」への資金援助が授与されました。世界保健機関(WHO)の「ドメスティック・バイオレンスと女性の健康に関する多国間調査」は、調査対象諸国の推定15%〜71%に横行が存在することを立証しました。日本の女性における発生率は、調査対象諸国中、最低水準でした。低比率は別のアジアの国、モルジブでも確認されましたが、バングラデシュやタイでは事情は異なりました。これまでのところ、ドメスティック・バイオレンスに対する態度および横行(親密な関係にあるパートナーによる暴力)に関する各国間の差異に関連する要因を検証した研究は限られており、さらに社会生態学の複数レベルでの要因の検証にマルチ分析を用いた研究となると、仮にあったとすれば、非常に限られています。吉浜教授の研究は、国際マルチレベル分析を実施することにより、日本を含む広範囲にわたる国々のドメスティック・バイオレンスに対する態度およびその発生における各国間の相違点と類似点を検証することを目指します。

センター催し物

2010年秋期映画シリーズ

写真提供：クライテリオン・コレクション／ジャナス・フィルムズ社。

CJSは、黒澤明生誕100年を記念し、同監督の8作品を新しい35ミリフィルムで上映します。シリーズは、9月24日から11月12日まで、ローチ・ホールのアスクウィズ・オーディトリアムで実施されます。さらに、CJSのヌーン・レクチャー・シリーズの3回(9月23日ポール・アンドラ、9月30日ドロレス・マルチネス、11月4日殿村ひとみ)は、黒澤の作品に焦点を当てます。シリーズのスケジュールにつきましては、第13ページのカレンダーをご覧ください。

舞踏映画イベント

ヴェレツ監督『Dance of Darkness(ダンス・オブ・ダークネス)』1989年。写真提供:エレクトロニック・アーツ・インターミックス(EAI)、ニューヨーク。

大学音楽協会(UMS)の主催により、山海塾が10月23日および24日にパワー・センターで2回のパフォーマンスを行います(http://www.ums.org)。CJS、UMS、ミシガン大学美術館(UMMA)は、このイベントに先立って、『Dance of Darkness(ダンス・オブ・ダークネス)』(エディン・ヴェレツ監督)と『犠牲』(ドナルド・リチー、土方巽共同監督)の、2本の舞踏映画を上映します。上映は、UMMAのヘルムト・スターン・オーディトリアムで行われます。詳細情報につきましては、第13ページのカレンダーをご覧ください。

第7回年次お餅つき

2010年のお餅つきでの「雅」の演奏。

2010年1月のCJSの年次お餅つきは、大学コミュニティ内外からの900名を上回る参加者で賑わいました。2011年のお餅つきイベントは、1月8日午後1時〜4時にイースト・ホールの数学学科アトリウム(所在地: 530 Church Street)で開催されます。このイベントは、書道、紙芝居、折り紙、ゲーム、音楽生演奏、そしてもちろんお餅つきと試食など、楽しみが盛りだくさんです。

書初めに取り組む参加者。

これまでの催し物

第20回年次アジア・ビジネス会議

この会議は、学生が主催するアジア関連ビジネス会議として最長の存続年数を誇ります。今年は2010年2月5〜6日に、ミシガン大学のスティーヴン・M・ロス経営大学院で開催されました。キャンパスの経営修士号課程の学生は、過去20年間にわたり、学内の様々なユニット(CJSを含みます)と協力してアジアの実業界ならびに多国籍企業のリーダーたちを招き、アジア地域における主要テーマについて協議してきました。今年度のテーマは、「ASIA: Leading Global Recovery(アジア: 世界の回復を先導する)」です。詳細情報につきましては、ウェブサイトhttp://www.rossabc.com/をご覧ください。

2月5日の同窓会の写真。(前列左から:)スコット・ラバディー、キース・ルブリン、アリ・ザミリ、エイミー・ルービン、ジェフ・ガイトン、ボブ・ウィルソン。(後列左から:)パット・フリーエル、マイク・ダン、アンドリュー・マスターマン、デイヴ・クウィグリー、アシュレイ・マッコークル、レロイ・ハワード

アウトリーチ：協働の学期

CJSでは、新学年度を開始するにあたって、最近のコミュニティ・アウトリーチ・イベントを振り返り、CJSのコミュニティ・アウトリーチに貢献してくださった方々に感謝したいと思います。

平和、愛、そしてお茶

2月、中国研究センター、日本研究センター、コリア研究センターの協働による第2回年次「Pan-Asian Celebration Workshop: The Art & Etiquette of Tea(アジア祝典ワークショップ: 茶道の技芸と礼儀作法)」が開催されました。デトロイト／ランシングとその周辺からの教師たちは、国際研究所に集合して茶貿易の世界的影響について学び、禅僧の座禅と茶会に参加し、その後、場所をミシガン大学美術館に移し、日本、中国、韓国の茶道を見学しました。ジャパン・ソサエティー・オブ・デトロイト(JSD)ウィメンズ・クラブは、在デトロイト日本国総領事館のアニタ・サヴィオ氏のナレーションに合わせて「茶の湯」のお手前を披露しました。このイベントを収録したビデオはCJSウェブサイト(http://www.ii.umich.edu/cjs/resources/teacher resources/av/tea)にあります。

グローバリゼーションとダイバーシティ

3月、ハウエル中学校において世界文化祭が開催され、2010年のお餅つきで漫画を描くレッスンを提供してくれた地元の画家であり漫画ファンであるクリスティーナ・メザックがCJSを代表して参加しました。地元教師によって主催されるこの世界文化祭は、小さな田舎の町に住む生徒に、他の文化の活動と人々との直接の接触を通じて異文化について学ぶ機会を提供します。

コミュニティ・サービス・プロジェクト

春季早々、CJSは、イプシランティ地区図書館ミシガン・アベニュー分館で公共図書館学実習科目の修了を目指す大学院生ジョディ・

2010年秋季カレンダー

ジョンソンから連絡を受けました。主に青年との作業に取り込む彼女は、アニメクラブの運営を引き受けたところ、クラブのティーン会員が日本語を学習したいとの強い希望を表明したのでした。その要請に応じ、CJS修士号課程2年生のエミリー・カノサが、毎週木曜夜、14歳から17歳までの生徒8名に日本語と日本文化を教え始めました。ジョディによると、「子どもたちは彼女のことが大好きで、日本語が勉強できることをとても喜んでいます。」

CJSコミュニティ・アウトリーチ・コーディネーター
ヘザー・リトルフィールド

ミシガン大学の学生、年次スピーチコンテストで第2位入賞

3月27日、在デトロイト日本国総領事館、デトロイト日本商工会、ミシガン日本語教師協会、デトロイト・ウィンザー日米協会が協賛する日本語スピーチコンテストに、歴史学・アジア研究学の2年生のローレンス・グロスが参加しました。「Why I'm hooked on Murakami (僕が村上に夢中になったわけ)」と題したスピーチで、第2位を受賞し、ホワイト・ラビット・プレスから250ドル相当のギフト券を獲得しました。

(左から)クリストファー・シャド、望月良浩、ローレンス・グロス、渡会尚子、平川ワイター永子、津田佐登子

寄付者

2009年12月に死去したロバート・ワードを追悼してご寄付くださった方々にCJSからお礼を申し上げます。

- リチャード・O・ブリッグス法律事務所
- ヨージフ&マラ・ガファリ夫妻
- マーシー&ロバート・オーリー夫妻
- シュワルツ・ファミリー財団(アラン&マリアンヌ・シュワルツ夫妻)

9月

16日–ヌーン・レクチャー*:「Toyota's Quality Problems: How Serious? What Can We Learn from Them? (トヨタの品質問題：どれほど深刻か？これから何を学べるか？)」ロバート・E・コール(カリフォルニア大学バークレー校ハース・スクール・オブ・ビジネス&社会学部名誉教授、同志社大学客員教授)(ミシガン大学交通研究所UMTRIとの協賛)。

20日–レセプション：鹿毛利枝子CJS2010〜2011年度トヨタ招聘客員教授(東京大学大学院総合文化研究科准教授)の歓迎レセプション。午後4〜6時、社会福祉学部ビル(School of Social Work Building)国際研究所ギャラリー。

23日–ヌーン・レクチャー*:「Rashomon's Shadow (『羅生門』の陰)」ポール・アンドラ(コロンビア大学東アジア言語文化学部マック人文学教授)

24日–映画上映**:『羅生門』黒澤明監督(1950年、88分、35ミリ)。

30日–ヌーン・レクチャー*:「Where the Heart Goes Astray: Guilt and Responsibility in Rashomon and Ikiru (心が道に迷うとき：『羅生門』と『生きる』における罪と責任)」ドロレス・マルチネス(ロンドン大学東洋アフリカ学院人類学部准教授)

10月

1日–映画上映**:『生きる』黒澤明監督(1952年、143分、35ミリ)。

7日–ヌーン・レクチャー*:「Bank Integration and Transmission of Financial Shocks: Evidence from Japan (銀行市場の統合と金融ショックの伝達：日本からの証拠」)」今井雅巳(ウェスリアン大学経済学部准教授)。

8日–映画上映**:『七人の侍』黒澤明監督(1954年、207分、35ミリ)。

14日–ヌーン・レクチャー*:「Michizane and Tenjin: The Illustrated Version (道真と天神：図解版)」ロバート・ボーゲン(カリフォルニア大学デイヴィス校東アジア言語文化学部名誉教授)。

15日–映画上映**:『蜘蛛巣城』黒澤明監督(1957年、109分、35ミリ)。

20日–特別映画上映:『犠牲』ドナルド・リチー監督(1959年、15分)；『Dance of Darkness (ダンス・オブ・ダークネス)』エディン・ヴェレツ監督(1989年、55分)。午後8時、ミシガン大学美術館ヘルムト・スターン・オーディトリアム(所在地：525 South State Street, Ann Arbor)(CJS、大学音楽協会、ミシガン大学美術館の協賛)。

21日–ヌーン・レクチャー*:「Myth and Counter-Myth in Early Japan (古代日本における神話と反神話)」ウィリアム・ボディフォード(カリフォルニア大学ロサンゼルス校アジア言語文化学部教授)。

22日–映画上映**:『隠し砦の三悪人』黒澤明監督(1958年、139分、35ミリ)。

28日–ヌーン・レクチャー*:「Whither Japan's Invisible Civil Society? (日本の見えない市民社会：これからは見える化？)」パトリシア・スタインホフ(ハワイ大学社会学部教授)。

29日–シンポジウム:「Relevant/Obsolete? – Rethinking Area Studies in the U.S. Academy (今日的／陳腐化？－米国の学術界における地域研究の再考)」。講師：ジル・マークス、パトリシア・スタインホフ、ケビン・オブライエン、スガタ・ボーズ、マイケル・ケネディ。午前9時〜午後6時、社会福祉学部ビル(School of Social Work Building) 1636号室(ミシガン大学国際研究所およびその諸研究センターとの協賛)。

29日–映画上映**:『天国と地獄』黒澤明監督(1963年、143分、35ミリ)。

11月

4日–ヌーン・レクチャー*:「Reimagined, Captured, and Framed: History in Kurosawa's 'Period Pieces' (再創造し、レンズにとらえ、フレームに収めて：黒澤の「史劇」における歴史)」殿村ひとみ(ミシガン大学歴史学部・女性学教授)。

5日–映画上映**:『用心棒』黒澤明監督(1961年、110分、35ミリ)。

11日–ヌーン・レクチャー*:「Past and Present: A Grand Unified Theory of Japanese History (過去と現在：日本史の大統一理論)」キャロル・グラック(コロンビア大学歴史学部ジョージ・サンソム教授)。

12日–映画上映**:『椿三十郎』黒澤明監督(1962年、96分、35ミリ)。

18日–ヌーン・レクチャー*:「Beyond Site/Sight: Art and Disability in Japan and Michigan (現場／視界を越えて：日本とミシガンの美術と障害)」犬塚定志(ミシガン大学美術学部教授)。

12月

2日–ヌーン・レクチャー*:「Imagination without Borders: Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility (国境のない創作力：フェミニストの画家富山妙子と社会的責任)」ローラ・ハイン(ノースウェスタン大学歴史学部教授)。

9日–ヌーン・レクチャー*:「Animal Martyrs' and Wartime Japan's Cult of Sacrifice (動物の殉教と戦時日本の犠牲カルト)」イアン・ジャレッド・ミラー(ハーバード大学歴史学部助教授)。

1月

8日–特別イベント：CJS第7回年次お餅つき：伝統のお餅つき、試食、音楽生演奏　書道、折り紙、漫画、生け花、ゲーム、その他。午後1〜4時、イースト・ホールの数学学科アトリウム(所在地：530 Church Street, Ann Arbor)。

* ヌーン・レクチャーはすべて無料で一般に公開され、別途通知のない限り、正午から午後1時まで社会福祉学部ビル(SSWB) 1636号室にて行われます。
http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/noon

** 映画上映はすべて、英語字幕付きの日本語です。入場料無料で、ローチ・ホール(所在地：611 Tappan Street, Ann Arbor)のアスクウィズ・オーディトリアムにて午後7時に開始されます。
http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/film

学生＆卒業生短信

有賀賢一(政治学博士課程)は、今夏、博士論文の口頭試問に合格しました。2010〜2011学年度中は、ハーバード大学国際問題研究所において日米関係プログラムの高等研究フェローとなります。

マイケル・J・アーノルド(スクリーンアート文化学博士課程)は、1年間にわたる日本での博士論文フィールドワークを終え、今秋にアン・アーバーに復帰しました。

ピーター・A(アレックス)・ベイツ(ALC博士号2006年卒)は、プロジェクト「The Culture of Quake: The Great Kanto Earthquake and Taisho Japan(地震文化：関東大震災と大正日本)」について国際交流基金のフェローシップを受けました。今学年度は家族と共に日本で過ごします。

ブルース・M・ブレン(CJS修士号1961年卒)は、日本の教育および研究の推進に寄与したこと、ならびに日米間の理解を深めたことを称えられ、旭日小綬章を受勲しました。同氏は、1973年から82年までシティバンク東京のバイスプレジデント、その後1982年から1985年までナイキ・ジャパンの副会長兼最高経営責任者を務めました。1986年から1988年までは東京のコンチネンタル銀行のシニアバイスプレジデント兼アジア太平洋部門長、その後1989年から1992年までは東京のスミス・ニューコート証券の極東担当ディレクター兼上級代表者を務めました。実業界での経歴に加え、全国中で国際ビジネスや異文化間交流について客員講師として、授業、講演を積極的に務めています。さらに、多数のコミュニティ組織・団体においても理事、委員会議長などの役職を通じて活動しています。

ウィリアム・S・バートン(歴史学博士課程)、**ケビン・L・ゲージ**(歴史学博士課程)、**クレア・M・カウプ**(CJS修士課程)、**ケンドラ・D・ストランド**(ALC博士課程)は、日本は横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの学年度プログラムに出席しています。

エミリー・カノサ(CJS修士課程)は、横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターのプログラムに参加し、その後、東京のファーマーズマーケット組織である東京朝市アースデイマーケットでインターンシップを修了しました。さらに、都会で養蜂を行う銀座ミツバチプロジェクトでも研究とボランティアを行いました。

デイヴィッド・R・キャッシン(経済学博士課程)は、米国国立科学財団EAPSIの資金援助を得て、2010年夏に神戸大学で日本の消費税制度を研究しました。

アレクサ・R・コウニング(アジア研究学士号2010年卒)は、伊藤国際教育交流記念財団から奨学金を授与されました。2011年4月に東京外国語大学修士課程に入学し、比較言語学と翻訳を修学する予定です。

アン・ホガート(CJS修士号1995年卒)は、2010年6月にシエナハイツ大学の大学院長に就任しました。彼女は2004年以来、同大学の助教授として、高等教育教師の教育と教育的指導における修士課程プログラムと専門課程プログラムを指揮してきました。

キム・ジウン(人類学博士課程)は、ヴェナー・グレン財団から博士論文フィールドワーク助成金を獲得しました。この10月から横浜市寿町で博士論文フィールドワークに着手します。

ショーン・E・キンケマ(環境学学士号2010年卒)は、フルブライト・フェローシップを受け、日本で研究を実施します。彼の研究プロジェクトは「Japan as a Model for Passenger Rail Development(旅客鉄道開発の模範としての日本)」と題されています。

ガブリエル・コッフ(人類学博士課程)は、「Transnational Labor, Rights, and Female Employment in the Japanese Sex Industry(日本の風俗産業における国際労働者、権利、および女性の雇用)」に関する博士論文研究でフルブライト・フェローシップを受けました。2010〜2011学年度は東京でフィールドワークを実施します。

アンドレア・K・ランディス(ALC博士課程)は、2010〜2011学年度も東京で博士論文研究を継続します。

ホイト・J・ロング(ALC博士号2007年卒)は、彼のプロジェクト「The Art of Association: Social Networks in Japanese Letter and Literary Culture(つながりのアート：日本の手紙・文学的文化におけるソーシャルネットワーク)」について国際交流基金から研究者短期フェローシップを授与されました。

岡垣知子(政治学博士号2005年卒)は、2009年秋季以来、ハーバード大学ライシャワー日本研究所の客員研究員です。4月には河野勝と共訳したケネス・ウォルツ著『Theory of International Politics(国際政治論)』が出版されました。現在は、日本の国際社会への参入に関する著作の草稿に取り組んでいます。

尾野嘉邦(政治学博士号2010年卒)は、4月に博士号を取得し、9月に新潟県の国際大学の助教授に就任しました。

猿谷弘江(社会学博士課程)は、6月に東京で開催された日本アジア研究会年次会において論文「Japanese Intellectuals' Commitment to the Public(日本の知識人の公衆に対するコミットメント)」を発表しました。この論文は、日本の1960年安保闘争における民主的な主張と実践に関する博士論文研究の一部を構成します。

ジョシュア・E・シュラケット(CJS修士課程)は、今夏、出島のオランダ工場からの江戸時代後期の食品エファメラの収集と陳列における物質性と精神性に関して調査を実施するためにオランダのライデンに滞在しました。

リンダ・H・タカミネ(人類学博士課程)は、米国国立科学財団EAPSIの資金援助を得て、今夏は京都に滞在し、日米両国のアルコホーリクス・アノニマスのメンバーの経験について研究しました。

照山絢子(人類学博士課程)は、2010〜2011学年度も東京で学習障害を持つ日本人に関する博士論文フィールドワークを継続しています。2009年12月には、フィラデルフィアで開催されたアメリカ人類学会年次会議において「Diversity in the Making: On Japan's 'Hattatsu Shogai' Movement(進行中のダイバーシティ：日本の『発達障害』の進展)」と題した論文により当初の調査結果を発表しました。

梅田道生(政治学博士課程)は、4月にシカゴで開催された中西部政治学会年次会議において「Moving the Mountain: Strategic Small-Party Nominations to Shift Major-Party Policy Positions under the Plurality Electoral System in Japan(山を動かす：日本の複数政党制の下で多数政党の政策的立場を移行させる戦略的少数政党指名)」と題した論文を発表しました。

デイヴィッド・L・ウェルズ(経済学／日本研究学士号2010年卒)は、フルブライト・フェローシップを受けて訪日し、「Yatai: A Disappearing Tradition(屋台：消滅しつつある伝統)」と題するプロジェクトの研究を実施します。

卒業生

2009年秋期CJS修士号
リンジー・A・アカシ
銘苅エリザベス
楊陽

2009年秋期、その他
デボラ・B・ソロモン(歴史学博士号)
2010年冬期CJS修士号
鈴木真理
ジョセフ・D・トルズマ
2010年冬期、その他
ケビン・J・バージマン(物理学修士号)
デイヴィッド・R・キャッシン
(経済学修士号)
ダニエル・M・ココラン(人類学修士号)
長谷川誠(経済学修士号)
マイケル・S・ナガラ(情報学修士号)
尾野嘉邦(政治学博士号)

新入生およびその出身校
(*=CJS修士課程学生)
キャメロン・C・カタルフ
(ウィッテンバーグ大学)*
テイラー・カゼラ
(ウィスコンシン大学オシュコシュ校)*
サラ・E・コナント
(マウント・ホルヨーク大学)*
アレクシス・S・ハリス(オベリン大学)*
スカイラー・E・ジョンソン
(カリフォルニア大学サンディエゴ校)*
グレン・K・ラシュレイ(ハーバード大学)*
スティーヴン・E・マッケナII
(ウェスタン・ミシガン大学)*
キャサリン・R・サージェント
(スミス大学)*
リンゼイ・M・スティフ
(ミシガン州立大学)*
コリーン・M・タイセン
(ミズーリ大学コロンビア校)*
メリッサ・D・ヴァン・ウィック
(カルヴァン大学)*
崔徳孝(客員研究生、コーネル大学)
アン・M・フォーマネック
(ロースクールJD課程、テキサス大学)
ドリュー・M・フォスター
(社会学博士課程、コロラド大学)
マーカス・C・グロデック
(ロースクールJD課程、
セントジョンズ大学)
クリストファー・J・シャド
(ロースクールJD課程、ミシガン大学)

CJSフェローシップ、2010年夏期
サラ・E・アルワード
(造園建築学修士課程)
エミリー・F・カノサ(CJS修士課程)
クレア・M・カウプ(CJS修士課程)
アーロン・P・プロフィット(ALC博士課程)
ジョシュア・E・シュラケット
(CJS修士課程)

外国語・地域研究(FLAS)
フェローシップ、2010〜2011年度
スカイラー・E・ジョンソン(CJS修士課程)
キャサリン・R・サージェント
(CJS修士課程)
ジョシュア・E・シュラケット
(CJS修士課程)
ジェニファー・L・ライト(CJS修士課程)

CJSフェローシップ、2010〜2011年度
ウィリアム・S・バートン
(歴史学博士課程)
エミリー・F・カノサ(CJS修士課程)
サラ・E・コナント(CJS修士課程)
モーリー・C・デジャルダン
(ALC博士課程)
ドリュー・M・フォスター
(社会学博士課程)
ケビン・L・ゲージ(歴史学博士課程)
クレア・M・カウプ
(CJS修士課程／ロースクールJD課程)
アンドレア・S・ランディス
(ALC博士課程)
グレン・K・ラシュレイ(CJS修士課程)
ケンドラ・D・ストランド(ALC博士課程)
照山絢子(人類学博士課程)

CJS学会旅費補助金、2009〜2010年度
猿谷弘江(社会学博士課程)、
日本アジア研究会年次大会(日本)
照山絢子(人類学博士課程)、
アメリカ人類学会年次会議
梅田道生(政治学博士課程)、
中西部政治学会年次会議

伊藤国際教育交流記念財団奨学金
アレクサ・R・コウニング
(アジア研究学士号2010年卒)

国際研究所個人フェローシップ、2010年度
エミリー・F・カノサ(CJS修士課程)
ジョシュア・E・シュラケット
(CJS修士課程)

ラッカム国際研究賞、2010年度
ガブリエル・コッフ(人類学博士課程)
ケンドラ・D・ストランド(ALC博士課程)

フルブライト・フェローシップ(日本)、
2010〜2011年度
ショーン・E・キンケマ
(環境学学士号2010年卒)
ガブリエル・コッフ(人類学博士課程)
デイヴィッド・L・ウェルズ
(経済学／日本研究学士号2010年卒)

米国国立科学財団EAPSI(日本)、2010年度
デイヴィッド・R・キャッシン
(経済学博士課程)
ライアン・W・カークル
(宇宙工学修士課程)
リンダ・H・タカミネ(人類学博士課程)

伝書
DENSHO

ミシガン大学
日本研究センター
1080 S. University, Suite 4640
An Arbor, MI 48109-1106
電話: 734.764.6307
ファクシミリ: 734.936.2948
Eメール: umcjs@umich.edu
ウェブサイト: http://www.ii.umich.edu/cjs/

所長: ケン・K・イトウ
アドミニストレーター: 深澤ゆり
プログラム・アソシエート:
ジェーン・オザニッチ
アウトリーチ・コーディネーター:
ヘザー・リトルフィールド
学務コーディネーター: 髙田あづみ

ミシガン大学日本研究センター出版会
Center for Japanese Studies
Publications Program
University of Michigan
1007 East Huron
Ann Arbor, MI 48104-1690
電話: 734.647.8885
ファクシミリ: 734.647.8886
Eメール: cjspubs@umich.edu
ウェブサイト:
http://www.cjspubs.lsa.umich.edu/ (新サイト)

出版会ディレクター: 殿村ひとみ
総編集長: ブルース・ウィロビー

CJS執行委員会: ケン・K・イトウ(職権上)、ケネス・盛・マッケルウェイン、岡まゆみ、仁木賢司(職権上)、殿村ひとみ

ミシガン大学理事: ジュリア・ドノバン・ダーロウ、ローレンス・B・ディーチ、デニース・イリッチ、オリビア・P・メイナード、アンドレア・フィッシャー・ニューマン、アンドリュー・C・リックナー、S・マーティン・テイラー、キャサリン・E・ホワイト、メアリー・スー・コールマン(職権上)

ミシガン大学は、人種、性別、肌の色、宗教、信条、国籍または出身国、年齢、婚姻状況、性的志向、自己の性別認識・表現、心身障害、退役軍人地位に関わらず、あらゆる人物に関する差別禁止および機会平等の方針を確約します。ミシガン大学は、また、差別禁止および差別撤廃に関する準拠法をすべて遵守します。

伝書編集人: ジェーン・オザニッチ
伝書デザイン: S2デザイン
伝書翻訳: 村上まどか
伝書制作: プリント-テック

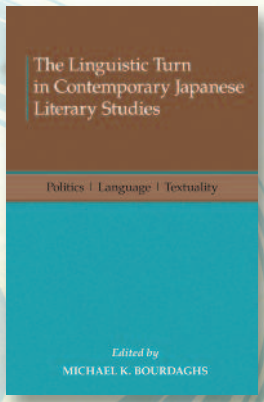
ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
The University of Michigan
1080 S. University, Suite 4640
Ann Arbor, MI 48109-1106

学

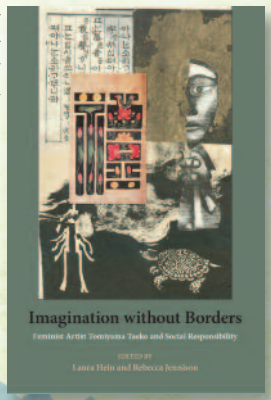
ミシガン大学
日本研究センター
2010年 秋季号

日本研究センター出版会新刊書

『*The Linguistic Turn in Contemporary Japanese Literary Studies: Politics, Language, Textuality*
(現代日本文学研究の言語学的転換：政治、言語、テクスト)』
マイケル・K・ボーダッシュ
(Michael Bourdaghs)著



『*Imagination without Borders: Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility*
(国境のない創作力：フェミニストの画家富山妙子と社会的責任)』
ローラ・ハイン
(Laura Hein)、
レベッカ・ジェニソン
(Rebecca Jennison)
共同編集



『*The Female as Subject: Reading and Writing in Early Modern Japan*
(主題としての女性：近代日本初期の読み書き)』
P・F・コーニッキ
(P.F. Kornicki)、
マーラ・パテッシオ
(Mara Patessio)、
G・G・ローリー
(G.G. Rowley)
共同編集

CJS出版会の新しいウェブサイトでは
オンライン注文ができます
http://www.cjspubs.lsa.umich.edu/